

# 10. 高齢者の看取りにかかわるボランティア活動の 有効性と課題

- 香本なぎさ（株式会社ソシエテ）  
佐口清美（神奈川工科大学）

## 【研究目的】

本研究の目的は、多死社会における高齢者の死の質（QOD）向上を目指し、関東圏で活動する高齢者の看取りにかかわるボランティア活動の実践を検証することで、活動の有効性と課題を明らかにすることである。

## 【研究の必要性】

2040年に年間死亡者数が160万人を超え多死社会のピークを迎える<sup>1</sup>。そのため在宅や施設における看取り体制の充実が急務である。これまで在宅や施設の看取りに対して、医療福祉職向けの手引きや連携ガイドの作成、看取り経験のない介護職員への教育プログラムの開発、看護師による死亡診断に対する教育プログラムの開発、ICTを利用した死亡診断等ガイドラインの整備などが行われてきた。昨今では「住み慣れた」「自分らしく」「好きなように」<sup>2</sup>といった死の質（QOD）にも関心が寄せられている。

地域での看取りには、体制整備・連携・人材・本人・家族の意思確認が必要であるが、中でも人材不足は深刻である。現状として、忙しく看取り対象者に十分な時間がとれない<sup>3</sup>、ちょっと外出したいが見てくれる人がいない<sup>4</sup>、夜間帯に入ると極端に手薄になる<sup>5</sup>などが確認できる。サービスを時間で区切りかつサービス提供者定員が規定されているフォーマルサービスのみでは、地域での看取りを完結させることは難しい時代になっていると言える。そこで家族以外のインフォーマルサービスに焦点をあて、看取りに関わるボランティア活動の有効性と課題を整理することとした。このことは、在宅や施設といった地域での看取り体制の充実や発展を図る上で一助になり得ると言える。

## 【研究計画】

### 1) 研究デザイン：質的記述的デザイン

### 2) 研究対象者：

研究対象者の選定は、関東圏において高齢者の看取りにかかわるボランティア活動を行った経験のある者とした。また、対象年齢は未成年者を除き、性別は問わないこととした。研究対象者の抽出は、ボランティア団体の責任者より紹介を受けるなどとし、調査の同意が得られた者を対象にした。

### 3) 調査内容・データ収集方法

ボランティア活動として高齢者の看取りにかかわった経験から、インタビューガイドに基づき語っていただく半構成的面接調査とした。また、研究協力者の基本調査として、性別、年齢、ボランティア活動歴、1事例におけるボランティア活動回数、1回のボランティア活動時間、有償・無償の有無、ボランティア活動場所（施設、居宅系施設、居宅）、研修の有無についても聞き取ることにした。調査場所は、研究対象者が希望する場所とした。

### 4) 分析方法

語っていただいた内容はICレコーダー等の媒体に録音し、逐語録にしたものをデータとした。その後、有効性と課題に注目して、内容分析に基づいて分析をした。

## 【実施内容・結果】

### 1) 研究対象者の概要

東京都、神奈川県、埼玉県において、高齢者の看取りにかかわるボランティア活動の経験がある8名が研究対象になった。ボランティア活動の経験年数は平均11.18年（±8.9年）。研究対象者8名の年齢は、40歳代前半から80歳代後半で、性別は全員女性であった。

### 2) 調査期間・データ収集

2020年6月～2021年3月の間に面接による調査を行った。COVID-19による感染リスクを避けるために、電話もしくはオンラインによる調査になった。

### 3) ボランティア活動の実際

ボランティア活動の場は、在宅、緩和ケア病棟、高齢者施設だった。

1事例におけるボランティア活動の回数は、看取りの対象になられた方が元気なときから関わりをもっているケースもあれば、看取りの時期から関わりが始まるケースもあり、年単位から1回で終了する場合があるなど多様であった。

1回のボランティア活動時間は、主に2時間程度で、泊まりで活動するケースもあった。

ボランティア活動時の報酬に関しては、有償があったのは2例で、残り6例は無償での活動をしていた。有償によるボランティア活動は、有資格者（看護職）による活動であった。

看取りに関わるボランティア活動の内容は、見守り、付き添い、傾聴、話し相手が求められる主な活動だった。

### 4) 高齢者の看取りにかかわるボランティア活動の有効性

高齢者の看取りにかかわるボランティア活動の有効性は、表1に示す通りで、本人に対するものとして6つの有効性を示すカテゴリーが抽出された。カテゴリーを『 』で示す。

傍にいる、話し相手になることで『感情の捌け口を聴く』ことは、『気持ちの整理を助ける』、『快の時間をつくる』ことに繋がっていた。また、独居で生活をされていた方、ご家族の事情でずっと誰かが傍にいることが叶わない方、気持ちが寂しい方において、見守る・傍にいる・寄り添いをすることで、旅立ちの前の『孤独感の緩和をする』ことになっていた。その他には有資格者でなくともできる範囲での『苦痛の緩和を図る』ことが可能であった。そしてボランティアは、本人にとっては『気軽な話し相手になる』位置づけのようで、看取り期にある高齢者の生活空間においては必要な存在であることが確認できた。

その他の有効性として、『決まりのない関わりができる』こと、『家族介護者の代わりになる』こと、『専門職との協働・連携をする』ことについても確認ができた。

### 5) 高齢者の看取りにかかわるボランティア活動の課題

高齢者の看取りにかかわるボランティア活動の課題は、表2に示す通り、6つの課題を示すカテゴリーとして抽出された。

主に関わり方に関する内容で、『継続した関りがもてない』や、触れられない、気づいても自分からは提案できないなどの『関わり方に制限があることへのジレンマ』より確認できた。また、この期の高齢者は会話ができる状態でない方がほとんどであるため、ボランティア自身で『模索しながら関わる』ことをしたり、『いる意味を考える』ことをしながら時間を共にしていないと、対象者に向き合えないことがわかった。その他課題に挙げられたカテゴリーは『立ち位置の難しさ』、『受け入れてもらう難しさ』であったが、これは、

看取りに関わるボランティアの位置づけが社会的に浸透していないこと、医療者でもなく介護するわけでもない、話を聴くだけであればこれ以上他人を入れたくないと思われる方もいるという背景がもたらすものであることが確認できた。

表 1

本人に対するボランティア活動の有効性

カテゴリー	コード
感情の捌け口を聴く	聴いてほしいのに聴いてくれないのが辛い
	自分がこのまま死んでしまって、その後のことが心配
快の時間を つくる	“すごく安心したようだ”と看護師等からきく
	笑ったり話したりということそのものを喜ぶ
気持ちの 整理を助け る	“話すことが嬉しそう”とヘルパー等からきく
	話しているうちに自分で気づく
孤独感の 緩和をする	話しながら納得していく
	話しながら自分の気持ちを確認する
	独居のご高齢者の方の見守り
	家族が到着するまでの見守り
苦痛の緩和 を図る	大切な人であることが伝わるように傍にいらる
	会話のできなくても傍にいる
	寄り添ってほしい想いに応える
気軽な 話し相手に なる	痛いところをさする
	口を湿らせる
気軽な 話し相手に なる	口の汚れをぬぐう
	楽な寝衣に作り替える
気軽な 話し相手に なる	ひたすら聴く
	話を聞いてくれる人としての認識
気軽な 話し相手に なる	しがらみのないから気軽に話せる
	そのときだけの友達感覚
気軽な 話し相手に なる	その場限りの人

表 2

ボランティア活動の課題

カテゴリー	コード
継続した 関わりが もてない	初対面で1度きりが多い
	ボランティアに行く回数が決まっている
関わり方に 制限がある ことへの ジレンマ	負担をかけてはいけいから触れてはいけい
	家族が見舞いに来られたときにどう見えるだろうか考える
相手からの お願いが あれば是非 にと思っ て、自分 からは申 し出ない	現在やっている仕事をしながらだと手を出したいけど我慢する
	相手からのお願いがあれば是非にと思っ て、自分からは申し出ない
模索しなが ら関わる	会話のできない方の傍にはどう寄り添うかを考える
	痛みや苦しみを分けてもうことができないので難しい
いる意味を 考える	ご本人がどう思っているかわからない
	相手が望んでいるかどうかは元気な時に聞いていないと分からない
立ち位置の 難しさ	関係ない第三者が入ることで希釈液みたいな役割になるのか？
	近い関係ではありたいけれども専門職よりは一歩引く
受け入れて もらう 難しさ	家族の中には入れない
	共通項を探す
受け入れて もらう 難しさ	初対面だと何者？という感じでみられる
	家族の友達みたいな感じで入ると受け入れてもらえた

### 【考察と今後の課題】

関東圏で活動する高齢者の看取りにかかわるボランティアの活動は、見守り、付き添い、傾聴、話し相手であった。その有効性は、相手の感情の捌け口の受け皿となり、気持ちの整理を助け、快の時間をもたらすものとなることが明らかになった。これらの効果は、制度の枠組みを外れた“決まりのない関わりができる”ことに要因があるものと考えられる。一方ボランティアの活動の課題には、受け入れや立ち位置、関わり方の難しさがあることが明らかになり、対象者の求めとボランティアがつながる手段に最も大きな課題あるものと推測された。

今回、65歳以上人口の増加が推計される関東圏（東京都・神奈川県・埼玉県）において、高齢者の看取りにかかわるボランティア活動経験者より得られた結果であったが、地域における活動事情に差があるのか否についても解明し、看取りの時期にボランティアが活動できる場を増やしていくための体制を検討することを今後の課題とする。

### 【経費使途明細】

使途	金額
NVivo Transcription 文字起こし時間 【10時間パック】	26,620円
分析用補助ソフト	
NVivo for Windows Student (12 month time limited)	15,400円
ICレコーダー	10,406円
データ保存媒体	9,328円
謝金（辞退者除く）	21,000円
通信費（封筒、切手、レターパック）	1,714円
消耗品（印刷紙、プリンタートナー）	10,971円
合計	95,439円
大同生命厚生事業団助成金	300,000円

\* COVID-19による感染防止対策のために経費使途の修正が大幅に必要なになった。助成金のうち使用しなかった204,561円は大同生命厚生事業団に返金。

### 引用文献

<sup>1</sup> 内閣府：令和元年版高齢者白書（全体版），[https://www8.cao.go.jp/kourei/whitepaper/w-2019/html/zenbun/s1\\_1\\_1.html](https://www8.cao.go.jp/kourei/whitepaper/w-2019/html/zenbun/s1_1_1.html)，2020/04/09アクセス

<sup>2</sup> 厚生労働省：平成29年人生の最終段階における医療に関する意識調査結果，[https://www.mhlw.go.jp/toukei/list/saisyuiryo\\_a.html](https://www.mhlw.go.jp/toukei/list/saisyuiryo_a.html)，2020/04/09アクセス

<sup>3</sup> 小野光美，原祥子（2014）：介護老人保健施設の看取りにおいて専門職が提供するケアと多職種連携の実態，島根大学医学部紀要37，9-25

<sup>4</sup> 堤千代，上野裕子，田村真由美ほか（2018）：地域住民による在宅ホスピスボランティア活動の現状と課題-在宅ホスピスボランティアA会の活動を通して-，Hospice and Home Care，26(1)，28-34

<sup>5</sup> 和田幸子，谷口里江，橋本陽子ほか（2016）：看取りまでの介護者の思いと在宅介護で望む支援，人間看護学研究，14，1-8